第22講
土地の隆起を伴う地形

平野地形は大きく侵食平野と堆積平野に分けられ，さらに堆積平野は「海岸平野」「洪積台地」「沖積平野」に分けられる。このうち，土地の隆起によって形成される地形である海岸平野と洪積台地について学習しよう。さらにこういった地形には特徴的な集落の成立をみることもある。集落についても計画的に設けられたものを中心に理解を深めていこう。

２２．１　海岸平野

洪積世（数万年前）に浅海底だった部分が隆起（海退）することで陸化し，海岸線に沿った細長い平野地形が形成されることがある。これが海岸平野である。沿岸は砂浜海岸となり，遠浅の海岸となるので港湾には適さない。鹿島灘沿岸（茨城県）や九十九里平野（千葉県）など。

[知っておこう]

海岸平野に特徴的な地形に，「海跡湖」と「浜堤」がある。

練習問題［４］図ウを参照しよう。広い範囲が陸地で，海は南西部にみられるだけだが，かつてこの地域は北東部の丘陵地（等高線が描かれている）を除き，全体が海だったと思われる。ジュンサイ沼の成因について考えてみよう。ジュンサイ沼もかつては海の一部であり，海底の凹地だったと思われる。地形が隆起することにより，その凹地に水が保たれた状態で周囲が陸化し，海から切り離されてしまった。これが海跡湖である。

Ｘ～Ｚの凸地は浜堤。かつてＸ付近が陸地と海の境界だった時代に，波によって運ばれた土砂が波打ち際に堆積し，細長い微高地がＸに形成された。やがてＹ付近にまで海が後退し，今度は「新しい波打ち際」であるＹに土砂が堆積した。そして現在は土地がさらに隆起することによってＺ付近が波打ち際になって，波によって土砂が運ばれている。なお，浜堤と浜堤の間の低地は「堤間湿地」と呼ばれる。この地形図はそうなっていないが，浜堤上には集落や畑地がみられ，堤間湿地は水田として利用されることも多い。

２２．２　洪積台地

洪積世に低地だった部分が隆起することによって標高数十ｍの台地となることがある。これが洪積台地である。関東平野の広い範囲は洪積台地によって占められている（武蔵野台地，下総台地など）。河川によって侵食された樹枝状の低地がみられることも。

＜チェック！＞

集落には大きく「自然発生的」なものと「計画的」なものがある。自然発生的な集落は，高燥な地形においては水を得やすいところ，低湿な地形においては洪水の被害を避けやすいところに立地する。前者の例は洪積台地における台地の麓，扇状地における扇端など。後者の例は氾濫原における自然堤防など。一方，計画的な集落には古代の「条里集落」，近世の「新田集落」，近代の「屯田兵集落」があり，いずれも直線的な道路，四角形の耕地区画に特徴がある。条里集落ならば「条」や「里」，新田集落ならば「新田」や「新開」を含む地名，屯田兵集落ならば方角や数字を用いた街路名（「北一線」，「西二号」など）に特徴があるので，判別は容易。詳細は後述。

２２．３　河岸段丘

洪積台地と同じく隆起によって形成された地形。河川上流部にみられる階段状の地形で，土地の段階的な隆起とそれに伴う河川の侵食作用によって形成された。河川の流れに並行するように等高線がみられ，等高線が密な部分（急斜面）を「段丘崖」，等高線が疎な部分（ほぼ平坦）を「段丘面」という。

２２．４　海岸段丘

隆起によって形成された地形。海岸部の段階的な隆起と波の侵食作用によって階段状の地形が形成される。

海岸段丘がみられる地域では，集落は海岸沿いの交通の便がいいところに成立することが多い。段丘面は耕地などに利用されているが，段丘崖は樹林帯などになっている。

海岸に沿って海食崖がみられることも。波の侵食により切り立った断崖となる。

<チェック！>

海岸平野と洪積台地はセットで考えるのがいい。茨城県の鹿島周辺や千葉県の九十九里平野は海岸平野であるが，その内陸側には下総台地や武蔵野台地などの洪積台地がみられる。関東平野が土地の隆起によって形成された様子をイメージしよう。なお，全国２位の面積を有する湖沼である霞ヶ浦は海跡湖である。海岸線に並行する細長い形や，海岸平野と洪積台地の間に位置することなどを，地図で確認しておくといいだろう。

ワンポイント

計画的な集落の成立について。

日本には，朝廷・幕府・政府の指示によって計画的に作られた集落が存在する。条里集落，新田集落，屯田兵集落である。いずれも直交する街路による土地区画がみられ，四角形・長方形の耕地が周囲に広がるという形態的特徴がある。

時代	集落の種類	形態	分布する地域	特徴ある地名
古代（～奈良）	条里集落	塊村（＊）	東北地方以南の日本全域。とくに奈良盆地。	「条」「里」
近世（江戸）	新田集落	散村（＊＊）	台地の上や扇状地の扇央，干拓地など。	「新田」「新開」
近代（明治）	屯田兵集落	散村	北海道（アメリカ合衆国中西部の開拓方式のタウンシップ制を参考）。	方位や番号を使用した街路名。例；「西一号」「北二線」

（＊）集村の一種。散村と区別しよう。

（＊＊）道路に沿って家屋が並ぶ場合もあり，それらは路村という。

なお，中世（平安～戦国）は中央の支配力が弱い時代だったために，計画的な集落は作られなかった。自然発生的な集村となる。外敵を恐れ，防御しやすい地点に立地する集落が多かった。

・ポイントとなる点を挙げておこう。

1）条里集落は古代の集落で塊村となる。周囲に濠を巡らすなどして防御機能を高めたものもある。とくに奈良盆地に多い。

2）洪積台地上にしばしば新田集落はみられる。道路に沿って家屋が並ぶ路村形態となることが多く，その背後には短冊状の耕地が開かれている。

3）路村形態や散村形態を成す新田集落や屯田兵集落は自宅と耕作地との距離が近く，耕作に便利である。一方，塊村形態の条里集落は自宅と耕作地との距離が大きい。

4）新田集落と同様に路村形態となる集落に，林地村がある。ドイツ東部にみられる開拓村であり，開拓道路に沿って家屋が並び，その背後に耕地が広がる。

第22講
土地の隆起を伴う地形［練習問題］

［1］(1)　次の図1（2万5千分の1地形図，原寸，一部改変）に含まれる地域の説明として正しいものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

（1993年度地理本試験第5問問1）

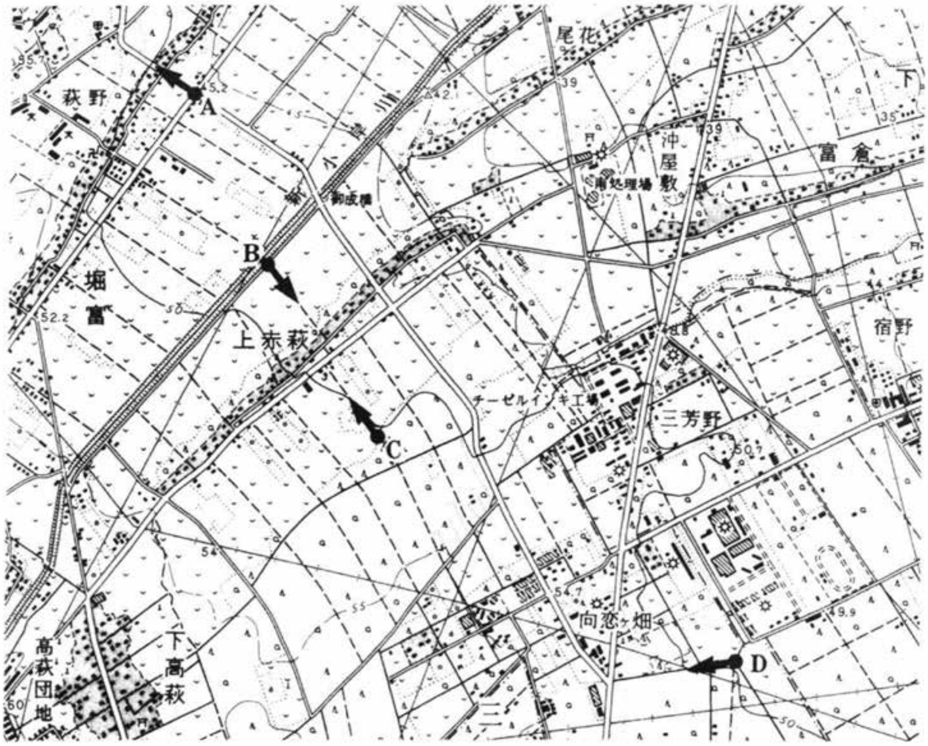


図1

①　この地域では畑作が卓越しており，水が得にくい土地であると考えられる。

②　堀富周辺の幾何学的に整然とした土地区画は，条里制に起源をもつものと考えられる。

③　北東から南西の方向に流れている新小岸川は，この地域の水田灌漑用水として利用されている。

④　下高萩集落の形態は塊村であるのに対し，上赤萩，富倉の各集落の形態は散村である。

（２） 次の写真**１**は，図**１**中のＡ地点～Ｄ地点のいずれかから，矢印の方向で撮影したものである。どの地点から撮影したものか，下の①～④のうちから，正しい地点を一つ選べ。

（同・問２）

写真１

（編集部　追記：編集上の都合により写真を掲載できないため，代替図版に差し替えております。）

①　Ａ地点　　②　Ｂ地点　　③　Ｃ地点　　④　Ｄ地点

［2］　下の２万５千分の１地形図(原寸，一部改変)に示された地域の地形と土地利用などについて述べた次の文章中の下線部①～⑦のうちから，誤っているものを二つ選べ。ただし，解答の順序は問わない。

(1989年地理本試験第２問問５)

この地域は，①標高25～35ｍの洪積台地と，これを刻んで発達した低地から成り，その高度差は②10ｍ以内である。低地は③水田として利用され，④東へ流れる古川のすぐ北を東西に走る道路付近と，小中町より北に向かう道路沿いには，樹木に囲まれた古い集落が，⑤台地の崖のふもとに立地している。また，一部では，低地へ住宅地が拡大している所もある。

一方，台地上では⑥畑が広がり，樹木に囲まれた集落もみられ，一部に平地林も残されているが，新しい住宅地や工場も立地している。図の北東部では新たに住宅団地が開発され，計画的な街路をもった団地内には⑦消防署や高等学校もみられる。

［３］　山田さんは，次の図１（２万５千分の１地形図，原寸，一部改変）に示される地域の野外調査を行った。山田さんが調査したことに関する下の問いに答えよ。

（1998年度地理Ｂ追試験第４問問１・２・４・５）

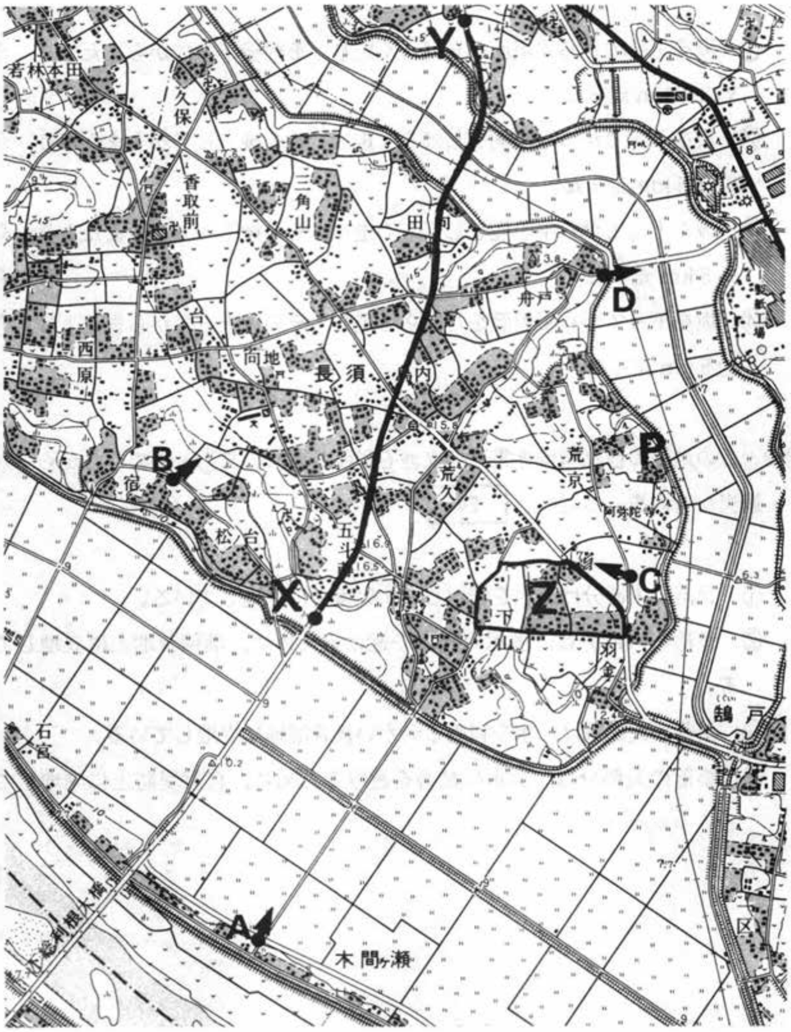


図１

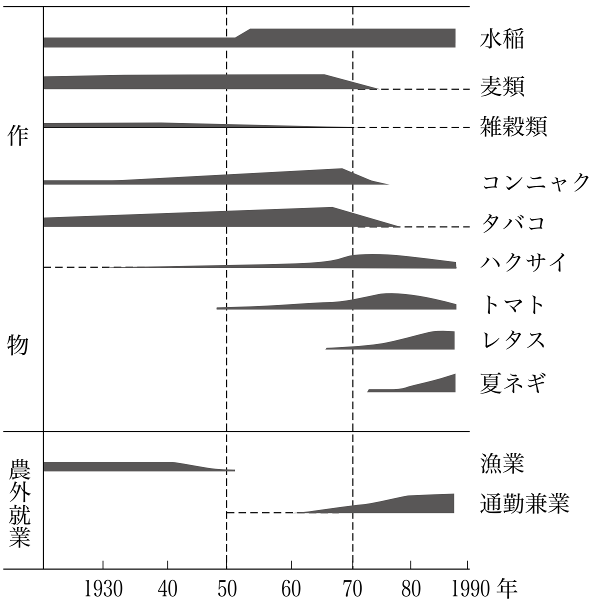
（１）　山田さんは，まずこの地域を自転車でまわってみた。図１中のＸ地点からＹ地点まで走ったときの起伏と距離について述べた次の文①〜④のうちから，正しいものを一つ選べ。

①　坂を上ってから平坦面をしばらく走り，その後下ってからまた上り，合計約2.5kmを走った。
②　坂を下ってから平坦面をしばらく走り，その後上ってからまた下り，合計約2.5kmを走った。
③　坂を上ってから平坦面をしばらく走り，その後下ってからまた上り，合計約５km走った。
④　坂を下ってから平坦面をしばらく走り，その後上ってからまた下り，合計約５km走った。

（２）　この地域の自然環境と集落の立地を説明した次の文①〜④のうちから，最も適当なものを一つ選べ。

①　集落の大部分は，水を利用しやすい輪中に立地している。
②　集落の大部分は，洪水の被害を避けるために，洪積台地上に立地している。
③　集落の大部分は，水を利用しやすい後背湿地に立地している。
④　集落の大部分は，洪水の被害を避けるために，自然堤防上に立地している。

（3）　山田さんは，資料収集と聞き取り調査を行って，図１中のＰ付近の農業の移り変わりを調べ，次の図２を作成した。図１や図２を参考にしながら，山田さんが説明した下の文章①～⑤のうちから，下線部が適当なものを二つ選べ。ただし，解答の順序は問わない。



黒地部分の幅が広いほど，作物の栽培や就業活動が盛んであることを示す。

図２

①　Ｐ付近にはかつて南北に1kmを超える細長い沼があり，漁業も行われていた。1950年代中ごろまでに沼は干拓されて水田になったが，<u>その後，減反政策で大部分が畑地になった</u>。

②　1970年代ごろまでは，雑穀類は主に自給用に作られていた。また，<u>コンニャクやタバコは主として換金用に作られていた</u>。

③　1960年代以降，付近に進出した工場で働く農民が多くなった。このため，<u>耕作の放棄により，農産物の出荷額は急減した</u>。

④　1960年代後半以降，麦類の栽培は価格の低迷などにより大幅に減少した。これは，<u>国内で麦類の消費量が減った</u>ことが主な原因である。

⑤　1970年代以降，野菜の栽培が盛んになった。近年では，交通網の整備に伴い，大都市市場向けの<u>鮮度がとくに求められる野菜類の出荷が増加している</u>。

（４）　山田さんは，図１中のＺ地域を歩いて，次の図３の土地利用図を作成した。Ｚ地域の土地利用について山田さんが考察した下の文①～④のうちから，適当でないものを一つ選べ。

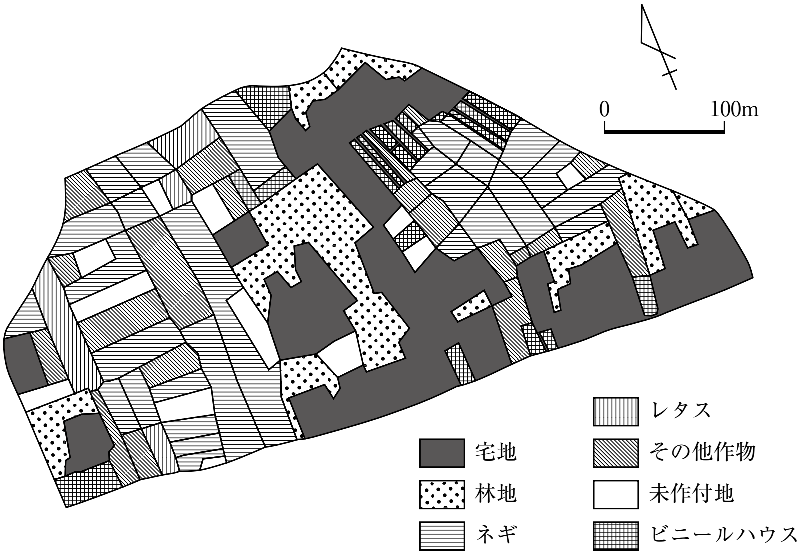


図３

①　宅地の近くにはビニールハウスが点在しており，この地域では集約的な農業が行われていると思われる。

②　林地は宅地の周辺に分布するが，その樹木を燃料源として利用している家は，現在ではほとんどないと思われる。

③　栽培されている作物やその作付面積からみて，この地域は野菜の産地であると思われる。

④　未作付地では，調査時に何も栽培されていないが，季節が変わると水田になると思われる。

［4］　図３の地図（ア～ウ）（２万５千分の１地形図，原寸，一部改変）について，下の問いに答えよ。

（1994年度地理追試験第１問問６～９）

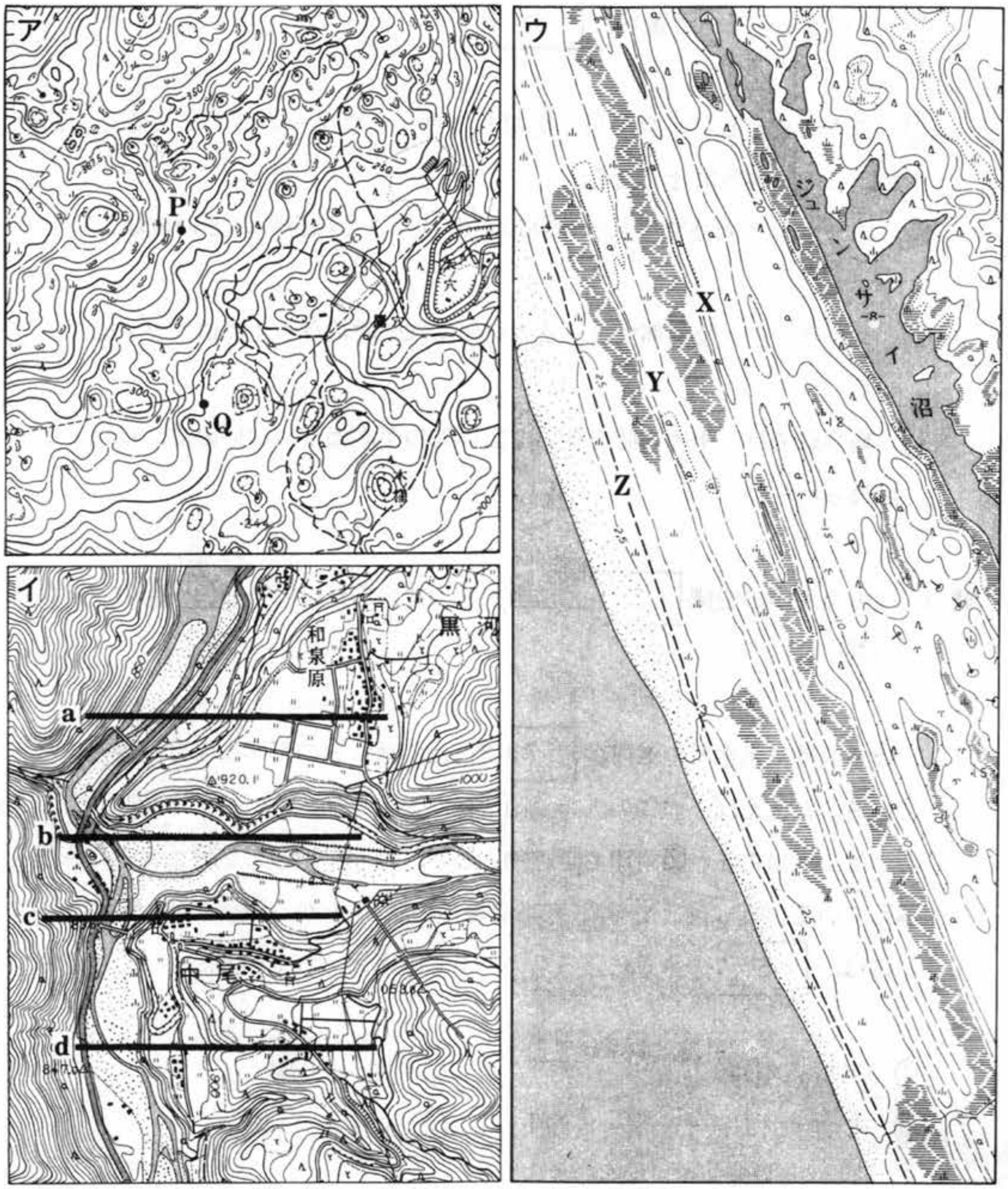


図３

(1)　図**3**の地図**ア**～**ウ**は，それぞれ海岸平野・河岸段丘・カルスト地形のいずれかを示している。**ア**～**ウ**の地図に示される地形と，これらの地形名称との正しい組合せを，次の①～⑥のうちから一つ選べ。

	ア	**イ**	**ウ**
①	海岸平野	河岸段丘	カルスト地形
②	海岸平野	カルスト地形	河岸段丘
③	河岸段丘	海岸平野	カルスト地形
④	河岸段丘	カルスト地形	海岸平野
⑤	カルスト地形	海岸平野	河岸段丘
⑥	カルスト地形	河岸段丘	海岸平野

(2)　図**3**の地図**ア**中のP地点とQ地点の標高差は何mか。次の①～④のうちから該当するものを一つ選べ。

①　35 m　　②　70 m　　③　140 m　　④　280 m

(3)　次の図**4**は，図**3**中の地図**イ**に示した四本の線（**a**～**d**）のうち，一つの線にそった地形断面図である。この断面図に該当するものを下の①～④のうちから一つ選べ。

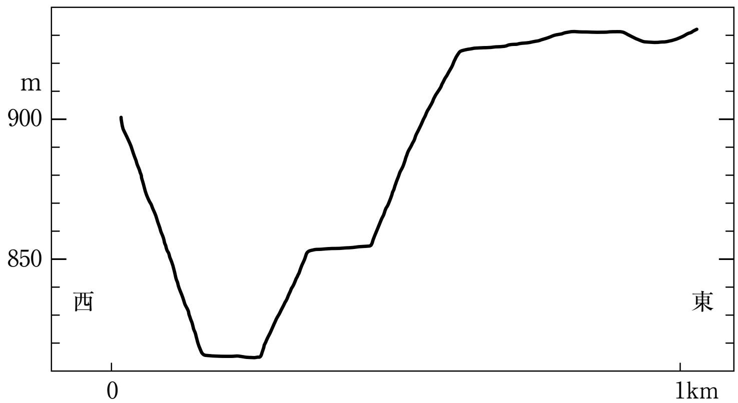


図**4**

①　**a**　　②　**b**　　③　**c**　　④　**d**

（4） 図３の地図**イ**についての読図の結果を述べた，次の文①～④のうちから誤っているものを一つ選べ。

① 和泉原と中尾の集落の周辺には，学校も郵便局もみられない。
② 中尾の集落の東側には水路式発電所がある。
③ 谷底の氾濫原には砂礫地(河原)が広がり，田はみられない。
④ 段丘上の耕地の大部分は田であるが，桑畑もみられる。

（5） 図３の地図**ウ**にみられる北北西から南南東の方向に延びる**X**・**Y**・**Z**の帯状の微高地が形成された順序について，次の①～⑥のうちから，正しいものを一つ選べ。

① X→Y→Z	② X→Z→Y	③ Y→X→Z
④ Y→Z→X	⑤ Z→X→Y	⑥ Z→Y→X

［5］　次の図５は，本州北部のある地域の２万５千分の１地形図（原寸）である。この地域の地形について述べた下の文章中の下線部①～④のうちから，適当でないものを一つ選べ。

（2010年度地理Ｂ本試験第１問問６）

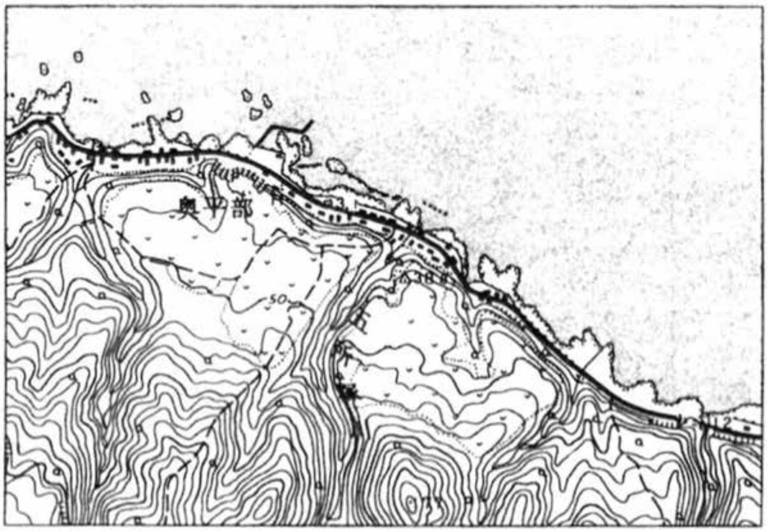


図５

この地域には，①<u>岩石海岸が発達しており</u>，②<u>堆積作用が活発である</u>ことを示している。海岸線より内陸側には，③<u>海岸段丘が発達しており</u>，④<u>この地域が隆起してきた</u>ことを示している。

［6］　カナさんは，調査地域の地形が人工的に大きく改変されていることに気がついた。そこで，古い地形図を利用して，特徴的な地形を調べてみた。次の図4は，1916年・1917年に発行された5万分の1地形図（原寸，一部改変）である。図4から読み取れることを述べた文として適当でないものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

（2007年度地理Ｂ本試験第6問問3）

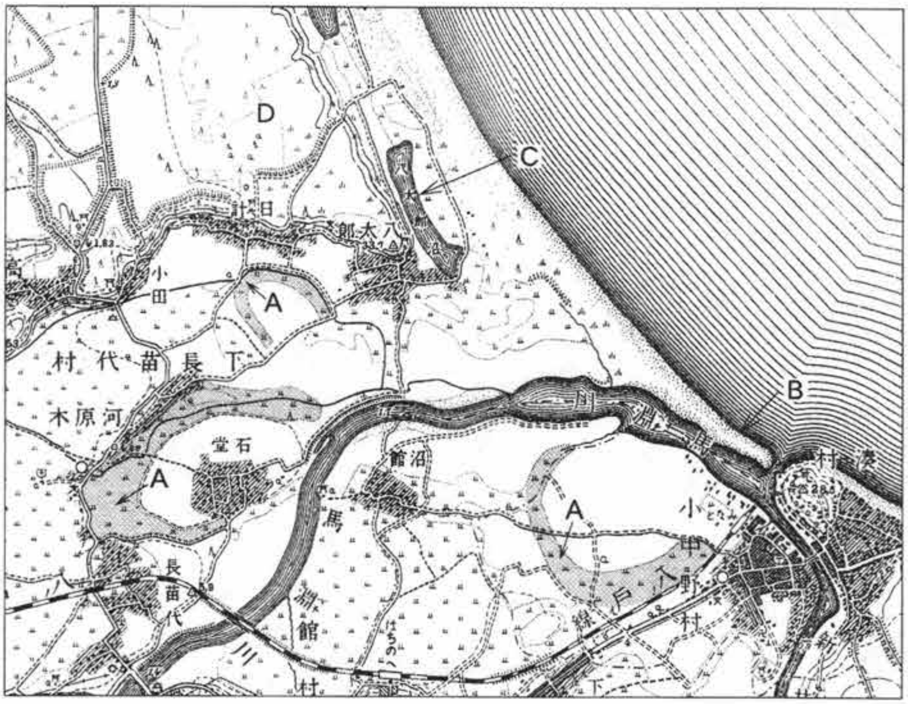


図4

① 三日月湖に縁どられた水田Aは，かつて馬淵川が流れていた跡である。

② 馬淵川の河口部において，河口をふさぐように発達した細長い地形Bは砂州である。

③ 北部にみられる沼Cは，かつて馬淵川に合流していた河川の名残である。

④ 北部にみられる海岸線より一段高い平坦な地形Dは，海岸段丘面である。

第22講
土地の隆起を伴う地形［確認テスト］

［1］　次の図３は，カオルさんたちが松本盆地を調査する際に使用した２万５千分の１地形図(原寸，一部改変)である。カオルさんたちは，梓川に沿って河岸段丘が発達していることから，図３中に示したＡ地点とＢ地点とを結んだ線に沿って地形断面図を作成した。その地形断面図として最も適当なものを，次の図４中の①～④のうちから一つ選べ。ただし，水平距離に対して垂直距離は約３倍で表現してある。

（2004年度地理Ｂ本試験第５問問６）

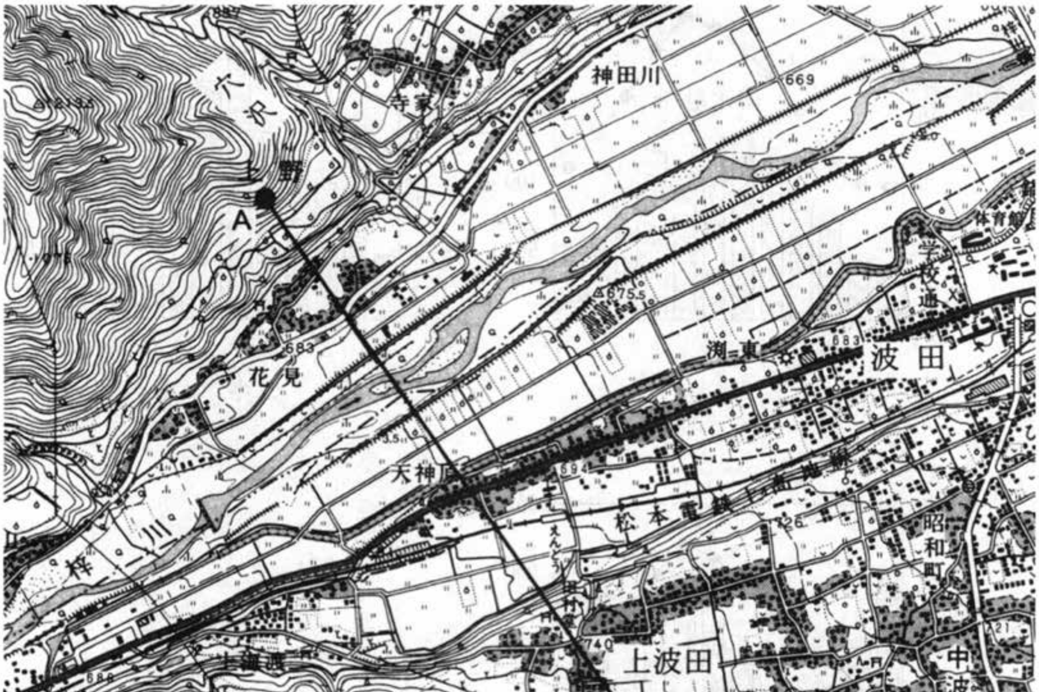


図３

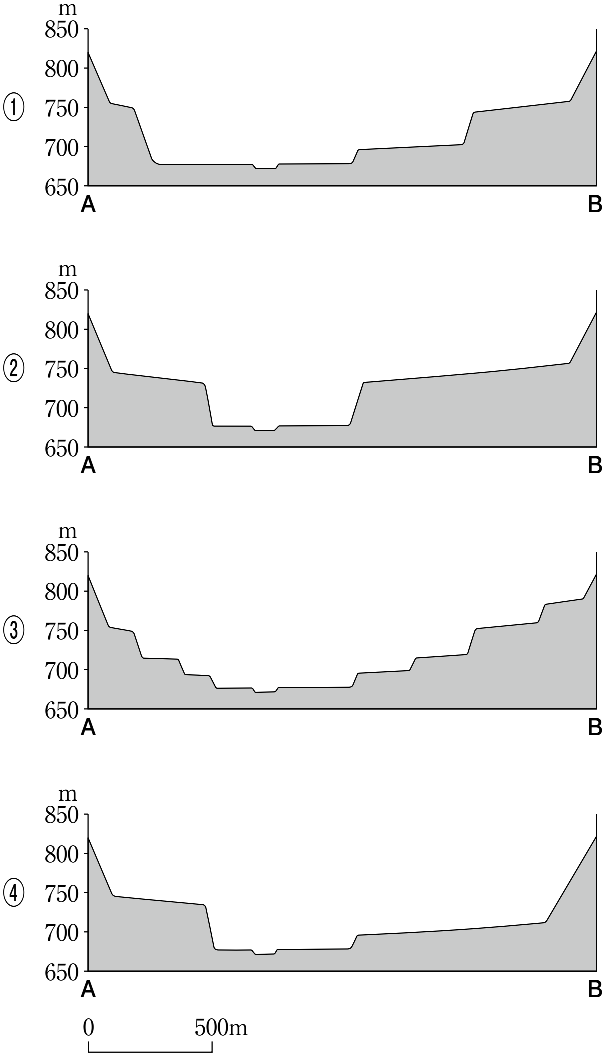


図４

［２］（１）　次の図２は，大井川の上・中流部にある４地域（ａ～ｄ）の２万５千分の１地形図（原寸，一部改変）である。図２中の各地域について述べた次の文①～⑤のうちから，誤っているものを二つ選べ。ただし，解答の順序は問わない。

（1997年度地理Ｂ追試験問３・５）

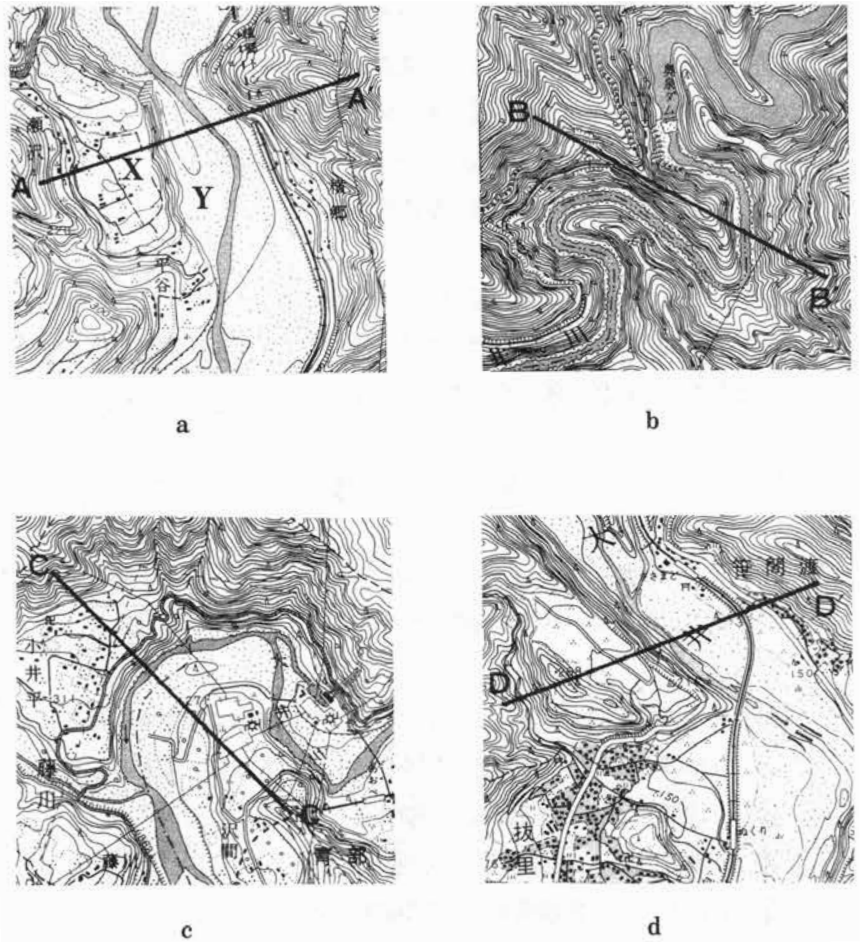


図２

① ａ地域では，洪水時に水をかぶるような低地にも果樹園がみられる。

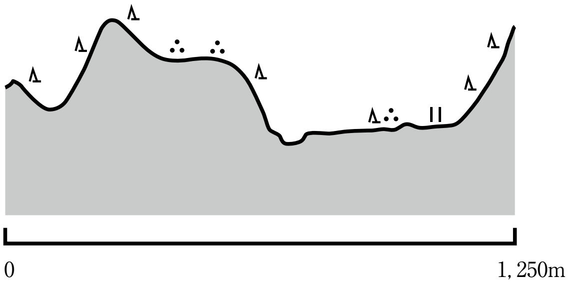
② ｂ地域では，河川は山地の間を曲流し，段丘はほとんどみられない。

③ ｃ地域では，電力を多量に消費する工場がみられる。

④ ｄ地域では「抜里」の集落を西に見下ろす丘に寺院や墓地がある。

⑤ ａ，ｃ，ｄの各地域では茶が栽培されている。

（2）　次の図３は，図２中の４地域に示した４本の線（A－A’，B－B’，C－C’，D－D’）のうち，いずれかの線に沿った地形断面図を土地利用の概略を示した図である。この断面図に該当するものを，下の①～④のうちから一つ選べ。

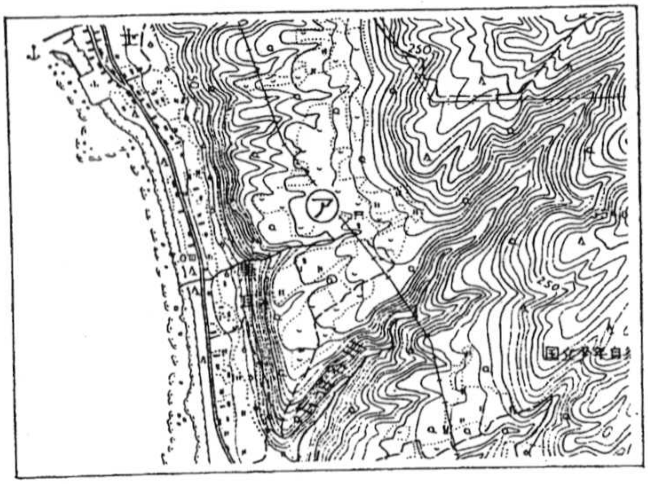


高さは水平距離の2.5倍にして描いてある。

① A－A’
② B－B’
③ C－C’
④ D－D’

［３］　地形図Ａにみられる(ア)の付近の地形はなんというか。また，このような地形は，どのような変化が起こったことを示しているか。次の組合せ①～⑥のうちから，最も適当なものを一つ選べ。

（1984年度地理追試験）



地形図Ａ

組合せ

① 準平原 － 土地の隆起，または海面の上昇

② 低湿地 － 土地の沈降，または海面の上昇

③ 海岸段丘 － 土地の隆起，または海面の低下

④ 準平原 － 土地の沈降，または海面の低下

⑤ 低湿地 － 土地の隆起，または海面の上昇

⑥ 海岸段丘 － 土地の沈降，または海面の上昇

〈***Note***〉

第 22 講　土地の隆起を伴う地形　解答

[１]正解　（１）①　（２）②

（１）　洪積台地である。洪積世に低地だった土地が隆起して，標高数十ｍほどの台地となっている。図中にみられる数字から標高を考えよう。全体に高燥な地形で，土地利用は畑が中心である。なお，このような水が得にくい地域の開発は新しく，図中の地域も主に江戸時代になって新田として開発された地域であろう。新田集落の特徴として，道路に沿って集落が並ぶ路村形態があり，本図においても上赤荻などに典型的にみられる。路村は背後に短冊状の耕地区画がみられることに特徴があり，自宅と耕地とが近接することで農作業を効率的に行うことができる。

①について。土地利用記号に注目。畑がほぼ全面を覆っている。正文。

②について。条里制ならば「条」の地名が見られるはず。誤文。

③について。「北東から南西」ではなく「南西から北東」。このように反対語の組合せを含む文は，誤文である可能性が高い。河川の流れは地形の高低すなわち標高に注目するといい。南西部に「54」とあり，北西部に「45.2」とある。南が高く，北が低い地形である。誤文。

④について。道路に沿っているので「路村」と見るのが妥当だろう。誤文。

（２）　手前に畑地があり，奥に樹林が見られる。Ｂの矢印に注目。畑が広がっており，矢印の先（つまり視線の先）に針葉樹林や広葉樹林が見られる。

[２]正解；②・④

②について。台地上の高い部分は「31.0」ｍなど。河川沿いの低地は「11.0」など。高度差は20ｍに達する。

④について。「古川」という河川を探してみよう。この北に沿う道路（やや黒く着色されているので，国道である）の東に「12.5」，西に「11.0」とある。東から西へと流れている。

ここに示された地形は「洪積台地」である。洪積世（旧石器時代から縄文時代）に低地だった土地が隆起し，標高数十ｍの台地になっている。「白根山貝塚」，「養護学校」，「根山町」など西部の台地と，「八代台」，「自動車試験場」など東部の台地をチェックしてみよう。土地利用が畑になっているので確認しやすいと思う。

これに対し，図の中央部や南部には低地がみられる。土地利用が田になっているので分かり易いだろう。河川の流れを確認し，これによって台地が削られ（侵食され）低地が形成された様子も想像するといい。

なお，選択肢⑤を正解（つまり誤り）とした人もいたが，それは「崖」という言葉に過剰反応したのではないかな。地形図で崖というのは決して極端な断崖絶壁ではなく，単なる斜面程度のところも崖と言ったりする。ちょっとわかりにくいかもしれないが，20ｍの等高線を探してこれを赤でなぞってみると，長富町や在原町の集落がこの等高線より低いところに位置することがわかるはず。洪積台地と低地がみられる地域においては，このように台地の麓に集落が自然発生する傾向がある。低地に接し水が得やすいことが最大の理由だが，低地の中央では水害に弱いので，台地に接するように家屋を建て，洪水の備えとしている。

［３］正解　（１）①　（２）②　（３）②・⑤　（４）④

（１）　Ｘは台地の麓。そこから斜面を上り，台地の上に出る。「16.5」ｍなどの標高が示されている。「田向」を越えると一旦斜面を下り，水田の中を通過する。水田の標高は，図の東部の「７」ｍが目安となる。最後は再度斜面を上ってＹに達する。「14」ｍの標高点がみられる。距離は図中で10cmほどであり，縮尺（問題文に示されているように１／25000である）に従い計算すると，実際の距離は250000cmすなわち2.5kmである。

（２）　立体視をしてほしい。多くの集落が標高10ｍを超える台地上に位置していることがわかるだろうか。かなり等高線が見にくいが，標高を表す数値は至るところに見られるので，それで十分にヒントになるだろう。よって正解は②。

外れ選択肢について。

①について。輪中というのは，堤防によって周囲を囲まれた地域のこと。ここにつくられた集落を輪中集落という。濃尾平野（愛知県・岐阜県・三重県の境の低地地域）に分布するものが有名。この地域は，揖斐川・長良川・木曽川が合流する低地であり，人々は水害の被害を避けるため河川の周囲に堤防をつくり続けた。河川が密集しているところなので，堤防も密集するようになり，いつの間にか集落全体が堤防によって囲まれるようになってしまった。

③について。後背湿地は，河川から見て，自然堤防の背後に広がる低湿な地形。水田として利用されることが一般的。

④について。自然堤防は河川沿いにできた微高地。数十センチ程度のわずかな

盛り上がりであると考える。高燥地であるので水田には利用しにくく，畑地や樹林となる他，洪水を避けるため村落が列状に連なることがある。

[補足]練習問題[１]～[３]はいずれも洪積台地をテーマとしたものであるが，[１]と[２]では洪積台地という言葉すら登場せず，[３]についても簡単に触れられているだけであり，特殊な知識は求められていない。単なる「台地」と考えておけば十分である。また，集落の立地についても，最優先で考えておかないといけないのは[２]にみられるような「台地の麓」というパターンであるものの，[３]においては主に台地上に集落が立地しており，多少矛盾している。厳密なものというより，あくまでそういった傾向がみられるといった程度のものと解釈してほしい。

（３）　各選択肢を検討していこう。

①について。Ｐ付近には沼があったそうだ。沼といえばもちろん低湿な地形。「Ｐ」とかかれているところは台地上であり，高燥であるので，沼があったのはそのやや左の「７」ｍの独立標高点を含む低地だろうか。そこは現在でも水田として利用されているのだから「畑地へ変わった」わけではない。

そもそも沼地のような低湿な地形が畑として利用できるケースは稀だろう。畑作物は一般に高燥な地形を好む。

②について。コンニャクやタバコのように加工する作物を工芸作物という。工芸作物の多くは商品作物である。綿花や茶などが代表的なところ。これらは自給的な作物ではないのだから，換金用に(つまり商業的に)作られていたのは当然のこと。

③について。図２を読み取ろう。麦・タバコ・コンニャクは減ったものの，水稲は増加し，野菜類の生産量も伸びた。全体の出荷額についてはその金額が直接的に示されているわけではないが，「急減した」ということはないだろう。

④について。小麦は例えばパンの原料となり，消費量が近年低下したとは思えない。この地域で麦の生産が減ったのは，安価な外国産の小麦との価格競争に敗れたからだろう。

⑤について。これはまさにその通り。図１の地域で，野菜が増えたということは都市出荷用としての栽培がさかんになったと考えていいだろう。近郊農業である。鮮度が重要である野菜は都市近郊での栽培に適し，さらに価格が高いことも有利点となる。

以上より，②と⑤が正解。土地利用（選択肢①），図の読解（選択肢③），食文化（選択肢④），農業（選択肢⑤）など，さまざまな話題が取り上げられていることがわかる。総合的な力が問われる良問。

（４）　土地利用に関する問題。水田は低湿な地形に広がる。扇状地の扇央や台地の上など乏水地でもみられることはあるが，その場合はため池などを利用して，水を確保している。原則として高燥な水の乏しい場所は水田として利用されることはない。

このことより④が誤り。Ｚ地域はその全域が台地上であり，このようなところに水田を開くのは厳しいと思われる。

［４］正解　（１）⑥　（２）②　（３）①　（４）③　（５）①

（１）

ア；小凹地がいくつもみられる。二酸化炭素を含んだ雨水によって石灰質の土壌が溶食されて形成された。カルスト地形である。

イ；河川の流れを確認してみよう。河川に並行していくつもの等高線がみられるが，密な部分（急斜面，崖）と疎な部分（緩斜面，平坦面）が連続している。河岸段丘である。

ウ；海岸平野とは，かつて浅い海底だった部分が隆起して陸地になったもの。海岸線に沿う帯状の低地である。本図においては，ジュンサイ沼より西側の海岸までの部分が全て海岸平野である。昔は海だったものの，土地が盛り上がることによって次第に陸地が広がっていった。その様子を想像してみよう。

（２）　等高線を数える。２万５千分の１地形図なので間隔は10ｍである。

（３）　西端と東端の標高を確認。ｂとｄは西端の標高が低いので外れる。ｃは東端が河川沿いの低地であるため外れる。ａのみ残る。なお，この断面図によって，土地が階段状になっていることを目でとらえよう。河岸段丘である。

（４）　ｃの東端付近に田の記号があるのが分かるだろうか。この北側に河川が流れていて，堤防が築かれているが，河川の流れとこの田の部分の標高は変わらない。河川沿いの低地すなわち「谷底」に田がみられる。

他にポイントとなる選択肢は③。

発電所の記号は工場に似たもの。cの東端のやや北東にそれらしきものがあるのがわかるかな。正確には「発電所・変電所」の記号であり，地図記号がほとんど出題されない大学受験地理においてしばしば出題される例外的な存在であった。その理由は，比較的見つけ易いことにある。発電所・変電所はほとんどの場合，送電線を伴っている。直線とその周囲に描かれた点々で示される送電線をたどっていけば，発電所・変電所にたどり着く可能性が高い。送電線から発電所・変電所を見つける練習をしておくといい。

（5）　これは浜堤（ひんてい）という地形。砂浜海岸において，波打ち際にうっすらと土砂が列状に堆積して形成される。ウの地形はかつてはジュンサイ沼の部分までが海面下であった。やがて少しだけ隆起し，X付近まで陸地となる。波が打ち寄せることによってXに土砂が堆積し，最初の浜堤が形成された，さらにY付近まで陸地化し，今度はYに浜堤ができる。最後に現在の海岸線まで陸地が進み，Zへと浜堤がつくられつつある。

なお，ジュンサイ沼のように海岸平野において海岸線と並行する湖沼がみられる場合，それは「海跡湖」である可能性が高い。浅海底が持ち上げられて陸地となった際に，海底の凹地に海水が残った状態で海から切り離される。

［5］正解；②

選択肢①と②から検討していこう。「岩石海岸」と「砂浜海岸」のように，岩と砂の地形を区別させる問題は定番の一つ。図から岩石海岸の記号を読みとっておこう。①は正文。岩石海岸とはいわゆる磯浜であり，波の侵食によって形成されたもの。②にあるような「堆積」ではない。②が誤りとなる。なお，砂浜海岸は土砂の堆積による地形。遠方から運ばれてきた土砂が積もって，砂浜となる。

さらに③を検討。等高線の状態から，海岸に沿って階段状の地形が形成されていることを読み取ろう。海岸段丘である。沿岸部で道路が走っている部分が低地。そこから等高線が何本かみられ，急斜面となっていることがわかる。これを「段丘崖」という。「奥平部」という文字の部分まで3本の等高線がみられるので，この段丘崖の比高は約30mであることが読み取れる。ここから内陸部に向かって，ほぼ平坦な地形（等高線が疎らではあるが何本かみられるので，緩い斜面となっている）が広がっており，こちらを「段丘面」という。そしてさらに南には60mの等高線より高い部分が山地となっている。正文。

さらに④について。段丘地形の形成理由は「隆起」である。まず波の侵食によっ

て平坦な部分と崖（海食崖）の部分がつくられるのだが，その土地が持ち上がることで平坦な部分は段丘面に，崖の部分は急斜面すなわち段丘崖となる。④も正文。

［6］正解；③

Ｃは「海跡湖」である。砂浜海岸に沿って細長い湖があったら海跡湖と見なしていい。海から切り離された水域が湖となっている。かつてはＣの背後の等高線の部分まで海だったと思われる。それが隆起して，海岸沿いの低平な地形（海岸平野）が出来上がった。この時，浅海底のうちのやや凹んだ部分がそのまま隆起することで，海水が内陸部に取り残され湖が形成された。選択肢③にあるように「河川」とは無関係。

日本２位の面積をもつ茨城県の霞ケ浦も海跡湖なので，地図帳で確認しておいてもいいだろう。関東平野も沿岸部はかつて海面下であった。それが隆起することで海岸沿いに平野が形成されたのだが，その時に同時に生じたのが霞ケ浦なのだ。

選択肢①参照。Ａのような河川の流れに沿った湾曲した低地は「旧河道」である可能性が高い。図４を見る限り馬淵川は比較的直線に近い流路を流れているが，かつては３ヵ所あるＡの部分を結ぶように大きく蛇行して流れていたことが想像される。

選択肢②参照。昔の河口はもっと北寄りだったはず。「馬淵川」の「川」の字のある付近がそのまま河口だったのではないだろうか。しかしそこから沿岸に土砂が堆積し，次第に河口が南東方向に移動してしまった。この細長く堆積した土砂の部分を「砂州」という。

選択肢④参照。等高線に注目。Ｄの部分はＣの沼がある低地より10ｍほど高いところに位置する平坦な地形。海岸段丘の段丘面とみていいのではないか。ちなみに等高線がある斜面の部分を段丘崖という。階段状の地形になっていることを図から読み取ってほしい。土地の隆起によって形成された地形。

第22講　土地の隆起を伴う地形　解答

［１］正解；①

等高線の様子から斜面や平坦な地形を読み取って，それをヒントにしながら解いて行こう。

ではＡからスタートし，Ｂへとゆっくり直線をたどって移動しよう。まず最初に急斜面があるようだ。等高線が密となっている。等高線は何本重なっているか？５本程度だろうか。つまりスタート直後に標高差50ｍ（この地形図の縮尺は１／25000であることが問題文に示されている。等高線間隔は10ｍごとである）の急斜面を下ることがわかる。

さらに進んで行こう。ここで等高線の疎な部分，つまりやや平坦なところに出る。緩やかな斜面が果樹園として利用されている狭い段丘面である。そして再び等高線が密となっている部分を通り過ぎ，「花見」集落を通過する。ここには「683」ｍの標高点がみられる。そのまま真っ直ぐに進み，河川を渡る。

ここまでを検討してみよう。等高線が密になった急斜面はここまで２箇所あり，河川まで４つの急斜面がみられる③が外れる。また，一つ目の段丘面が狭く，「花見」を含む河川沿いの低地の面積が比較的広いことから，②と④が外れ，①が正解となる。

せっかくなので，河川の南側についても断面を確認していこう。

河川を渡り（断面図では河川の流れも小さなくぼみによって表現されている）「天神原」へ達する。「原」という字のすぐ上の部分で等高線を１本越えており，ここで標高が10ｍ上昇。さらに南下。松本電鉄と交差する付近の標高は，すぐ脇の「694」の数字が手がかりとなる。①の断面図を見ると，この付近に標高690ｍほどの広い平坦面が広がっている。

さらに「田村堂」という文字の辺りで等高線を数本登り（段丘崖である），平坦面に出る。上波田集落が立地するこの段丘面の標高は「740」ｍである。最後に斜面を駆け上りＢ地点へと達し，こちらでは標高は820ｍほどに達しているようだ。

［２］正解　（１）①・③　（２）④

（１）　①について。低地というのだから，河川沿いの低平な地形を見る。そこに果樹園はあるか？

②について。「段丘」とは階段状の地形のこと。急斜面とやや平坦な土地（あるいは緩やかな斜面）が組み合わさったもの。この急斜面を「段丘崖」，やや平坦な土地を「段丘面」という。

ａ参照。ここには段丘がみられる。ＹとＸの間の等高線の密な部分が段丘崖。Ｘが段丘面。ＸからＡにかけて再び斜面。

ｃ参照。「小井平」の部分が段丘面。

ｄ参照。河川からＤに向かって進むと，段丘面に茶畑が開かれている。

③について。「電力を多量に使用する」工業と言えば，アルミニウムの製錬が考えられる。しかし，日本においてはアルミニウム工業はすでに衰退しており，さらにｃの図をみても工場は見当たらない。工業に似た記号はあるが，これは「発電所・変電所」である。送電線を伴っていることを確認しよう。

④について。「寺院」や「墓地」の地図記号はどのようなものだろう。

⑤について。ａ・ｃ・ｄでそれぞれ「茶」の土地利用記号（３つの点の組み合わせ）を探してみよう。それぞれ段丘面に茶畑がみられる。茶はこのような水はけのよい小高い土地で栽培されるものである。

以上より，①は完全に誤り，②は正文と考えられ，③は誤り，⑤は正文。よって解答は①と③となる。

なお④については判定する必要はない。寺院はともかく，墓地のようなマイナーな地図記号が入試問題として問われることは稀であり，解答に選ばれるケースは少ない（つまり，本問のような誤文判定問題の場合は無条件に正文）と考えて構わない。一応参考までに，ｄ参照。「抜里」の集落を探す。その東に小高い丘がある（等高線が閉曲線になっているので，わかりやすいだろう）。茶畑が確認できる。ここにある縦の棒の下に短い線がくっついた記号が「墓地」である。

（２）　断面図の問題。まず両端を確認。左端（西端）の方が右端（東端）よりも低い。また，河川を示す「くぼんだ部分」が中央よりやや右寄り（東寄り）にある。基本的な情報を確認し，それぞれ検討していこう。

ａ参照。河川はＡ―Ａ’のほぼ中央ではあるが，ややＡ’側に寄っている。これは断面図と一致する。

ｂ参照。河川はＢ’に寄っている。ちょっとこれでは寄り過ぎていて，断面図

の河川の位置とはずれていると思う。

ｃ参照。河川はほぼ中央を横切っているが，それでもややＣの方に寄っているとみていいだろう。これでは断面図とは適合しない。

ｄ参照。ほぼ中央であるが，ややＤ’寄り。断面図と合致。

さらに突き詰めていこう。ここでポイントになるのが，断面図における微妙な盛り上がり。河川を表していると思われるくぼみと，右端（1250ｍ）のほぼ中間地点，「茶畑」と「田」の土地利用記号の間に挟まれたところにわずかな盛り上がりがあるのがわかるだろうか。これは地形図においてはどのように表されているか。

ここで注目してほしいのはｄ。河川とＤ’の間に鉄道がみられ，それが盛り上がった地形のところを通っている。土の崖の記号によって盛り土部が表現されており，そこを鉄道が走っている。これが，断面図における「わずかな盛り上がり」なのではないか。正解は④となる。

［３］正解；③

全体として階段状の地形になっているのがわかるかな。海岸に沿って帯状の低地が広がり，その内側に等高線が密になっている急斜面，そして（ア）を含むほぼ平坦な土地があり，さらにその上には再び急斜面。海岸に沿う階段状の地形を海岸段丘という。土地の隆起と，波による侵食によって形成された地形である。